

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463498

研究課題名(和文)在宅療養者の予期せぬ入院の予防・回避に向けた訪問看護指標開発の基礎的研究

研究課題名(英文)Reducing Hospital Readmission: Future Direction of Visiting Nurse

研究代表者

福山 由美 (Fukuyama, Yumi)

佐賀大学・医学部・准教授

研究者番号：40529426

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在宅における「予期せぬ入院」の定義、また、訪問看護が予期せぬ入院を予防できるかを検討した。成果として、自宅死率が国内で低い佐賀県の調査結果を以下に示す。佐賀県の在宅療養支援診療所/病院の活動状況の経年変化から、死亡場所に影響を与える要因を検討した。その結果、佐賀県の二次医療圏すべての地域において自宅死は増えていなかった。死亡場所に影響する在宅療養支援診療所/病院の活動は、訪問看護との連携が多いほど、自宅死($p<.001$)での死亡が増えていた。このことから、訪問看護と在宅療養支援診療所/病院の連携、自宅死増加に影響し、訪問看護は予期せぬ入院の回避に貢献できる蓋然性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Saga Prefecture has the lowest rate nationwide for old-aged persons dying at home, rather than in a facility. The aim of this study was to investigate factors that influence the choice and location of dying locally.

The most significant factor influencing dying at a non-hospital care facility was the number of visits by the doctor from the support-care clinic to the aged person at home and to the non-medical facility ($p<0.001$). And the most significant factor influencing dying at home was the frequency of cooperation between the local support-care clinic and the visiting-nurse station ($p<0.001$). To increase the proportion of aged persons dying at home, the above findings suggest increasing the number of visits by the support-care doctor, and increasing the frequency of cooperation between the support-care clinic and the visiting-nurse station.

研究分野：在宅看護

キーワード：在宅医療 訪問看護 予期せぬ入院 公衆衛生

1. 研究開始当初の背景

世界に前例のない速さで超高齢化社会に突入した我が国においては、介護保険における医療ニーズをもつ利用者の増加に伴い、とりわけ訪問看護への期待は大きい。しかし、これまでの訪問看護に関する実態調査研究は、喫緊の課題である在宅医療・介護整備基盤の一つとして、訪問看護事業所の経営基盤強化に関する大規模調査や国が取り決めた訪問看護制度内容が主である。そのため、介護報酬改定に併せた訪問看護サービス状況は把握できるが、長期間、質の高い在宅での医療・介護を目指しているわが国では、訪問看護が在宅医療の中で、具体的に何に貢献しているかについては不明確な部分が多い。その原因は、これまでの訪問看護の実態調査研究において、長期間の在宅医療・介護を継続するなかで予期せぬ入院をした在宅高齢者の疫学調査、また訪問看護師が如何に予期せぬ入院を予防・回避できるかといった視点での調査が行われていないことにあると考える。一方医療機関においては、2003年から急性期入院を対象としてDPC制度(DPC/PDPS)を皮切りに、慢性疾患患者の増加と入院日数の短縮化等から、再入院率(退院から6週間以内における再入院)が評価項目として設定されはじめている。しかし、この再入院率の期間では、医療機関側の退院支援調整の評価はできるが、数年間定期的に通院をしていた在宅療養者が突然入院した理由を把握することは不可能である。

米国や欧州における訪問看護の調査研究は、在宅療養者の日常生活自立度・QOL・予期せぬ入院・費用対効果をアウトカムに設定した介入調査が精力的に行われている。その前提には、訪問看護師が行うべき観察やケア内容・方法を一定程度確立して、介入研究によるエビデンスが構築されている。しかし、わが国の訪問看護の調査研究は、前述したように、訪問看護サービスの現状は把握できるが、どのような対象者に対して何を観察し、アセスメントして、支援をしているのかは明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究は、在宅療養者の予期せぬ入院回避を揺るぎないものとする訪問看護実践指標の開発に向け、在宅における「予期せぬ入院」の定義づけ、また、我が国における訪問看護が予期せぬ入院に貢献できるか検討することを目的とした。

3. 研究の方法

文献検討、インタビュー調査、在宅医療支援診療所活動報告書における量的調査、訪問看護師と介護士の役割調査

4. 研究成果

1) インタビュー調査の結果

在宅における「予期せぬ入院」を定義づけ

るため、在宅医療専門家へのインタビュー調査を行った。

その結果、DPC機能評価を基にした考えは医療機関側の見方であり、在宅医療・在宅ケアの見方は異なる、また、在宅医療の整備状況が予期せぬ入院の定義づけを困難にしていることが示唆された。

そのため、本研究では、予期せぬ入院を「計画的な入院ではない」「急変」とし、それらを体験した療養者と家族を対象に、入院に至った際の予兆等や、その要因として考えうる内容について調査を行った。

その結果、調査協力が得られた在宅療養者は5名であった。

対象者の平均年齢は80.4歳、性別は男性2名、女性3名であった。5名の対象者の急変から入院に至るまでの様子について、得られたデータを分析した結果、58のコードが抽出された。類似性や関連性により分類を行うと、41の小カテゴリー、22の中カテゴリー、6つの大カテゴリー(中カテ22項目、小カテ41項目)【1.急性病態症状の出現】【2.自分の取るべき行動に対する理解不足】【3.治療を受けていることによる自己の健康への過信】【4.日常生活の継続】【5.在宅サービスを利用していることでの安心感】【6.療養者の生活信条】が導き出された。

本調査より、急変が起こった際に自覚症状を感じていても在宅療養高齢者自身での受診につながりにくいということ、さらには、予兆を捉えていても療養者の我慢しがちな性格などが受診の妨げとなっていることが明らかとなった。

2) 在宅医療支援診療所活動報告書における量的調査

在宅医療の要となる在宅療養支援診療所が、どの程度、訪問看護事業所と連携をし、住み慣れた地域で安心して暮らせることに貢献しているかを調査した。調査場所は自宅死率が国内でも低い佐賀県とし、佐賀県の在宅療養支援診療所/病院の活動状況の経年変化から、死亡場所に影響を与える要因を検討した。

その結果、2010年から5年間において、佐賀県の二次医療圏すべての地域において自宅死は増えていなかった。死亡場所に影響する在宅療養支援診療所/病院の活動は、訪問看護との連携が多いほど、自宅死($p < .001$)での死亡が増えていた。このことから、訪問看護と在宅療養支援診療所/病院の連携、自宅死増加に影響し、訪問看護は予期せぬ入院の回避に貢献できる蓋然性が示唆された。

3) 訪問看護師と介護士の役割調査

調査対象は看多機施設利用者で呼吸器医療処置が必要な者で同意が得られた4名。データ収集は、本研究に同意した対象者が看多機に宿泊する24時間を連続撮影した。撮影した映像は1分毎に誰が何を利用者に対して

行っているかタイムスタディ調査票に記入した。なお、調査票に記入するケア行為は、介護保険審査の一次判定に使用されているケアコードを用いた。分析は、看護師、介護士、看護師-介護士協働の三群に分け、各ケアの内容における時間を Kruskal-Wallis にて検討した。統計解析には SPSS23.0 を使用した。

その結果、対象者 4 名の平均年齢は 75.0 ±1.0 歳、ADL はすべて全介助であり、直接支援の平均時間は 307.8±46.3 分であった。ケア行為 9 大項目における三群の違いは、「入浴、清潔保持、整容更衣」の 1 項目にみられ、看護師-介護士が協働でケアを行っている時間が多かった(p<.033)。他 8 項目のケア行為においては、職種間、また看護師-介護士が協働して行うケア時間に有意差はなかった。

通常介護士が主に行う「入浴、清潔保持、整容更衣」の生活援助は、呼吸器医療処置が必要な療養者に対しては介護士と看護師が協働でケアを行っていた。

在宅における予期せぬ入院を回避するためには、訪問看護師の予防的介入はもちろん重要であると考えられる。しかし、これまでの調査から、看護師と介護士が共に連携して、予期せぬ入院を回避し可能な限り住み慣れた地域で暮らしていくには、看護職と介護職がいかに協働し業務分担していくのかにかかっている。そのため、今後は、在宅に携わる看護師や介護士が、いかに予期せぬ事態に対応できるか、その教育資材の開発が急務だと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

福山由美,新地浩一.:佐賀県の在宅療養支援診療所/病院の活動状況と死亡場所に影響を与える要因.佐賀県医師会医界佐賀,11,59-62,2016.

〔学会発表〕(計 11 件)

- 1) 福山由美, 新地浩一, 松川真葵, 秋山明子. 鹿児島県在宅療養支援診療所・病院の活動状況と死亡場所の経年変化に関する検討. 第 76 回日本公衆衛生学会, 2017.
- 2) Yumi Fukuyama, Maiko Kido, Miyoko Baba, Akiko Akiyama, et. al: Basic Study toward Quantification of the Nursing and Care Delivered in a Small-Scale Multifunctional in House Care Provider TNC&WANS International Nursing Research Conference, Thailand 2017 (国際学会)
- 3) 城戸 麻衣子, 馬場 美代子, 古野 貴臣, 福山 由美. 看取りを目的とした看多機利用の現状報告第 75 回日本公衆衛生学

会総会 2016 年 10 月 26 日~2016 年 10 月 28 日大阪

- 4) 古野 貴臣, 福山 由美. 福岡県の在宅療養支援診療所・病院における在宅看取りの 3 年間の変化第 75 回日本公衆衛生学会総会 2016 年 10 月 26 日~2016 年 10 月 28 日大阪
- 5) 福山 由美, 古野 貴臣, 城戸 麻衣子, 馬場 美代子, 秋山 明子. 佐賀県在宅療養支援診療所・病院の活動状況と死亡場所の経年変化に関する検討第 75 回日本公衆衛生学会総会 2016 年 10 月 26 日~2016 年 10 月 28 日大阪
- 6) Takaomi Furuno, Yumi Fukuyama. Dying at Home correlated with Home-Visits by Clinics at a Secondary Medical Area in Fukuoka Prefecture. Asian Society of Human Services Congress in Fukuoka 2016 年 07 月 15 日~2016 年 07 月 16 日 Fukuoka, Japan (国際学会)
- 7) Yumi Fukuyama, Takaomi Furuno, Yuko Nakakita, Akiko Akiyama. Dying at Home or in the Hospital : Factors influencing the Conditions around Dying The 3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing 2016 年 07 月 01 日~2016 年 07 月 03 日韓国釜山市 (国際学会)
- 8) 松下容子, 東川亜依子, 福山由美, 秋山明子, 田中敦子訪問看護ステーションにおける連絡・相談所要時間と関連要因の検討第 20 回日本在宅ケア学会 2015 年 07 月 18 日~2015 年 07 月 19 日東京一橋ホール
- 9) 岡村勇飛, 吉田里奈, 西村舜二, 中北裕子, 福山由美, 秋山明子. 介護者の悲嘆感情に影響する要因第 74 回日本公衆衛生学会 2015 年 11 月 04 日~2015 年 11 月 06 日長崎ブリックホール
- 10) 吉田里奈, 岡村勇飛, 西村舜二, 中北裕子, 福山由美, 秋山明子. 在宅療養者の介護者が在宅医療スタッフに求めている支援第 74 回日本公衆衛生学会 2015 年 11 月 04 日~2015 年 11 月 06 日長崎ブリックホール
- 11) 中北裕子, 福山由美, 西村舜二, 秋山明子. 三重県における在宅療養支援診療所での看取り場所の変化と活動状況に関する検討第 74 回日本公衆衛生学会 2015 年 11 月 04 日~2015 年 11 月 06 日長崎ブリックホール

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
平成 28 年度から在宅研究成果公開のための
ホームページを構築した
<http://www.communityhealth.med.saga-u.ac.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

福山 由美 (FUKUYAMA YUMI)
研究者番号：40529426
佐賀大学・医学部・准教授

(2)研究分担者

なし()
研究者番号：

(3)連携研究者

秋山 明子 (AKIYAMA AKIKO)
研究者番号：00633869
畿央大学・健康科学部・教授

(4)研究協力者

新地 浩一 (SHINCHI KOUICHI)
研究者番号：30404164
佐賀大学・医学部・教授